様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 31 日現在

機関番号：34101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720175
研究課題名（和文）　近代日本の多層的地域帰属意識の形成と持続に関する基礎的研究
―郡を素材として―

研究課題名（英文）　Basic research on *gun*-identity forming the multilayered sense of belonging in modern Japan

研究代表者
谷口　裕信（TANIGUCHI　HIRONOBU）
皇學館大学・文学部・講師
研究者番号：10440835

研究成果の概要（和文）：本研究では主として郡政（郡の行政・自治）との関連性の解明について成果を得た。第 1 に、三重県度会郡公報には度会郡独自の情報選別が見られ、それが度会郡の地域意識の萌芽となった可能性がある。第 2 に、荘内会は山形県庄内地方三郡（飽海・西田川・東田川）が、地域の諸課題を協議する場であったが、そのような三郡の一体性と一方で各郡の独自性とがあり、両者のバランスの上に成り立っていたことが指摘できる。

研究成果の概要（英文）：The main results of this research are as follows: 1) Official Bulletin of Watarai-gun (Watarai-gun Koho), published about once a week for 23 years, had a characteristic way of choosing information, which implied a sign of Watarai-gun identity. 2) Shonaikai, formed by the three *gun* (Akumi, Nishitagawa, and Higashitagawa) in Shonai, Yamagata Prefecture, was a meeting to talk over the matters of the area, and maintained the balance between the unity and individuality of the three *gun*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：日本史
科研費の分科・細目：近代史
キーワード：地域意識、郡役所、郡公報、度会郡、神苑会、荘内会

１．研究開始当初の背景

近代は国民国家の時代であり、国家に対する帰属意識、すなわち国民意識が創出される過程であった。日本近代史においても牧原憲夫をはじめとして、国民化の回路についての研究が進められてきた。しかし人々の帰属意の対象は言うまでもなく国家だけではない。居住地、出身地、組織など多様であり、しかもどれか一つに限定されるものでもどれが他に優先するものでもない。そして帰属意識は、何らかの経緯で形成されたものが積み重なっていき、多層的でかつ全体として一体性を持つものではないか、と考えられる。

このような帰属意識の多層性を解明する

上で、郡を本研究の素材とした。それは1980年代以降の研究により、郡が単なる行政機関にとどまらず、地域としての一体性を有することが明らかになってきたからである。また市町村が効率化の名の下に何度となく経験してきた合併に対して、郡が町村のゆるやかな連合体としての「もう一つの選択肢」たり得たのではないか、との見通しを検証するためでもある。

２．研究の目的

ごく簡潔に本研究の目的をまとめるならば、郡という地域への帰属意識がどのように形成され、それが持続していくのかを明らかにするということである。このことを以下の(1)～(3)で敷衍しよう。

(1) 国民国家研究において、国民意識の形成の解明には国民化の回路の分析が必要であったように、地域への帰属意識の形成・持続の解明には、その回路の分析が必要である。国民化の回路の一つに、学校における国語教育があげられるが、地域への帰属意識の形成の場合は、例えば郷土教育が想定できるだろう。1930 年代の郷土教育に関しては伊藤純郎の研究に詳しいが、1930 年代以前にも柳田国男の郷土研究論の影響による郷土教育あるいは郷土誌編纂が行われたことも指摘されている。

(2) 同郷団体（例えば竹永三男や布施賢治の研究など）も、地域への帰属意識を考える上で重要だろう。同郷団体は府県、旧藩、旧国など、様々な地域的なまとまり（＝多層性）を基に成立したことが知られており、本研究の目的に合致したものであるといえよう。

(3)また郡という地域としての一体性の形成には、郡役所の果たした役割も看過できない。郡役所は明治 11 年（1878）～大正 15（1926）年に設置されていたが、この間の郡役所の活動、とりわけ(1)と(2)に関する活動を検証するためにも、郡役所関係史料の調査・収集・分析が必要である。

３．研究の方法

(1)三重県下の郡関係史料の調査と収集

①三重県旧度会郡における郡行政文書の調査・収集

郡行政文書とは郡役所と郡内各町村（場合によっては大字も）・三重県との往復文書のほか、郡役所が発行した度会郡公報もこれに含まれる。研究期間内で調査効率を上げるため、調査対象は旧度会郡のうち現伊勢市内に残存する文書に限定する。研究目的に合致する史料の撮影と目録作成を行う。

②三重県旧度会郡を単位とする団体に関する史料の調査と収集

県内紙としては最大の『伊勢新聞』や『大阪朝日新聞』の三重版などにより、旧度会郡内の諸団体の活動を把握する。また旧度会郡内で発行された新聞や雑誌も、調査・収集する。とりわけ旧度会郡出身者を構成員とする同郷団体の度会郷友会については、現存する同会発行の雑誌のほか、同会に関係した人物の個人史料についても可能な範囲で調査する。

③三重県旧度会郡以外の郡行政・自治関係および団体史料の調査と収集

調査・収集対象の史料の種類は①・②に同じであるが、度会郡と比較対照して、度会郡の地域的特徴を析出する。

(2)三重県外の郡関係史料の調査と収集

(1)の史料調査・収集作業と並行して行う。目的は(1)-③に同じ。

(3)研究の目的との関係

①郷土教育については、郡誌の編纂経緯や編纂に携わった人物・団体を解明し、教育現場での使用といった郷土教育への接続を展望する。

②同郷団体の雑誌記事、あるいは郡を選挙区とする県会議員らの言動から「自郡の語り方」を抽出し、「郡民」意識の析出へとつなげる。

４．研究成果

本研究の成果は以下の(1)～(4)のとおり。「２．研究の目的」の(1)～(3)のうち、主として(2)と(3)に関するものである。地域帰属意識の回路を分析して、「郡民」意識を抽出する段階には到達できなかったが、郡を媒介とした地域結合の多様なあり方を明らかにすることができたと考える。

(1)三重県内の郡公報の調査・収集・分析

①度会郡公報

同公報は明治 36 年（1903）～大正 15 年（1926）の 23 年間にわたり号外も含めて1200 号以上も発行され、発行期間の長さと号数の多さでは、全国で類例を見ないものである。このうち多くの号が一宇田町有文書（伊勢市）に残存しているが（三重県『一宇田町有文書調査報告書』）、さらに中村町有文書と通町有文書の調査を進めた結果、号外を除く定期号1104号中1096号の残存を確認できた。明治期の残存状況については拙稿「明治期の度会郡公報に関するノート」にあるように、定期号 451 号分すべてと号外 66 号分である。大正期については定期号 653 号のうち 645 号分（欠号は第 34、94、175、335、637、639、642、648 号）と号外 73 号分で

ある。このような残存状況の良さも度会郡公報の史料的価値を高めるゆえんの一つといえる。本研究はこれらをすべてデジタルカメラで撮影し、記事目録の作成に着手した。

その上で記事内容の分析をおこなった（前掲拙稿）。明治 44 年度から行政視察員費が郡予算に計上されたことに伴い、視察報告書類の掲載件数・分量が増加したこと、同時期に郡内諸団体（斯民会・青年会・教育会・海員掖済会・農会など）の活動に関する記事も増加していること、したがって郡公報全体の情報量が増加してその重要性が増したことを指摘できる。また郡役所から発せられる通報類、上級官庁等からの通牒類のすべてが郡公報に掲載されていないことから、記事の掲載に際して郡当局による情報の取捨選択が行われていたことがわかった。度会郡にとって必要な情報は何かを郡役所が取捨選択する、という意味において、度会郡行政の独自性があると言える。

この点に関してさらに言えば、郡公報の発行によって度会郡単位での地域意識形成の萌芽が生まれたのではないか、ということだ。もちろんこれは郡役所という情報の発信側における可能性でしかなく、情報の受け手の問題をクリアしていないので、この推測の検証は今後の研究に譲りたい。情報の受け手としては、度会郡公報の配布先であった町村役場・小学校・郡会議員・大字を想定しており、郡役所が郡公報を通じて発信した情報に対して、これらの受け手がどのように反応したのか、ということである。

②一志郡公報・飯南郡公報・志摩郡公報

①以外の三重県内の郡公報を三重県史編さん室で調査した。度会郡公報とほぼ同時期に刊行されており、三重県として郡公報刊行を推奨していた可能性がある。これらの郡公報の記事と度会郡公報のそれとを比較対照させ、①同様に掲載情報の取捨選択が独自になされていることが確認された。

(2)三重県度会郡内の諸団体

①神苑会

同会は伊勢神宮の「神領」と呼ばれる、宇治山田（現伊勢市）を中心とした地域の有志の団体である。明治中後期において神宮鎮座地＝神都の具現化・実質化を目指す活動をおこなった。神宮の神苑整備、徴古館建設などの倉田山苑地の整備をおこなったほか、倉田山苑地の整備が呼び水となって外宮内宮間を結ぶ国道（御幸道路）が建設されるなど、宇治山田の都市形成に対する直接・間接の貢献は大きかったと評価できる。

神苑会は厳密な意味での郡単位の団体ではないが、同会創立にあたって度会郡長が仮会頭となるなど、郡役所の果たした役割は決して小さくなかった。また同会の活動は地域帰属意識の表れ方の一事例ということもできる（「神苑会の活動と明治の宇治山田」と題して、2010 年 12 月 4 日に皇學館大学月例文化講座で講演。この講演をもとにした同タイトルの論文を、『伊勢の神宮と式年遷宮』に所収予定）。

②度会郷友会

同会は度会郡出身者および関係者を会員とするいわゆる同郷団体であり、明治 27 年（1894）3 月に創立された。同会の活動内容、主張を分析するため、同会発行の雑誌『度会』を伊勢市立伊勢図書館と伊勢市史編さん係で複写したが、第 4 号、17 号、33 号、80 号、84 号、86 号、90 号、91 号、93 号～97 号、188 号～192 号、195 号～197 号、199 号、201 号～202 号、205 号の所在を確認するにとどまった。その後の調査で神宮文庫にほぼすべて所蔵されていることが確認されたが（神宮司庁『神宮文庫所蔵和書総目録』）、研究期間内に調査を完了することができなかった。また上記複写分については、記事目録の作成に着手した。内容の本格的な分析は今後の課題であるが、「２．研究の目的」の(1)に関連して一点だけ触れておきたい。『度会』の表紙に「郡誌参考」との書き込みがあり、これは度会郡誌の編纂にあたって『度会』が史料の一つとなっていただろうということを示している。郡誌・郷土教育・同郷団体とのつながりが推測され、これについては、今後の論点の一つになると考えられる。

(3)山形県庄内地方の郡と団体―荘内会―

荘内会は庄内地方の飽海・西田川・東田川の三郡により構成される団体で、明治 20 年代～30 年代に設立されたと考えられる。三郡が庄内地方の諸問題、例えば鉄道・道路・橋梁・水産業などの土木・勧業関係、中等教育施設・学生寮・奨学金などの教育関係の議題を持ち寄り、対等な立場で協議する場であった。荘内会の運営の中心的な存在であったのは三郡の郡長であり、交代で幹事となって議事一切を取り仕切った。ただし各郡の会員の顔ぶれには郡長以外にも、県議・郡議・有志者・新聞社代表らがおり、その幅広さが注目される（「庄内会一途」、酒田市立図書館光丘文庫蔵）。庄内地方は近世期庄内藩以来、地域としての一体性を有しており、郡が三つに分割されていても地域利害について協議する場が必要だったと考えられる。

ただしそのような一体性の中にあって、会員は各郡の利害代表者でもあった。明治 32 年に会員数が各郡の均衡を著しく破らないように設定されようとしていたのは、そのことを裏書きするものであろう。また奨学事業のように、荘内会が大正 10 年（1921）に三郡の共同事業とした後、これに各郡の奨学事業を統合しようとしたにもかかわらず、各郡

の奨学事業は結局継続した。東田川郡育英会のように、戦後まで継続したものさえある（日本育英会『一般育英事業団体現況調査』)。つまり荘内会は庄内三郡の一体性と、各郡の独自性とのバランスの上に成り立っていたということができるのである（「協議体としての荘内会」として『地方史研究』に投稿中)。

ところで「２．研究の目的」の(3)で述べたように、郡単位の結合においては、郡役所が中心的な役割を担っていたと考えられる。それが大正 15 年の郡役所廃止後にこれらの結合、すなわち協議体としての荘内会や、「４．研究成果」(2)-②で見た同郷団体としての度会郷友会は、どのように変化していったのだろうか。これも今後の研究で解明する課題としたい。

(4)地域意識と公共について

①松沢裕作『明治地方自治体制の起源―近世社会の危機と制度変容―』（東京大学出版会、2009 年）の書評

内務省研究会・条約改正と国家形成研究会「明治日本の国家形成過程における条約改正」（科研代表者五百旗頭薫）で報告した（2009 年 6 月 27 日)。公共をキーワードにして本書の意義を指摘し、展望を示した。

②田中正造の自治思想

田中正造日記の記述に見える公共・公益という言葉や、地方自治をキーワードにして、田中正造の地域意識について言及した論文を執筆し、2011 年度に刊行予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 谷口裕信、明治期の度会郡公報に関するノート、皇學館大学紀要、査読無、49 輯、2011、33-45

〔図書〕（計　２件）

① 清水潔、岡野友彦、上野秀治、谷口裕信ほか 4 名、皇學館大学出版部、伊勢の神宮と式年遷宮、2011（9 月発刊予定)、350 頁（112-157)

６．研究組織

(1)研究代表者

谷口　裕信（TANIGUCHI　HIRONOBU)

皇學館大学・文学部・講師

研究者番号：10440835

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：